

水俣病の原因に新事実

貝からイオウ化合物

世良博士発表
廃水との関係深まる

熊本大学医学部長世良完介博士は十四日、東京本郷の「好仁会」で開かれた「文部省科学研究費関係班長会議」で水俣病について「水俣病の貝からイオウ化合物を含む有機水銀塩を検出した」との新事実を明らかにした。



世良博士

水俣病は二十八年いらい水俣湾岸の魚や貝類を食べたものから発生、現在までに八十三人が発病、うち三十三人が死亡（死亡率三九

）助かったものの中樞神経を胃
され不具者になるという世界にも例のない珍しい病氣。この原因としては有機水銀があげられ、これは塩化ビニールを作っている新日本窒素水俣工場の廃水に含まれている無機水銀が魚や貝の体中で変化したものだという研究者側の主張に対し、会側は全面的には認めていない。

世良博士らは最近、湾内のヒバリーガイモドキ（通称ムラサキイ貝）の臓器を手にしたもの一々中から百

PPM（一PPMは百万分の一）の水銀を検出したが、このさいイオウの化合物であるチオエーテルを含む有機水銀塩があることを突き止めた。

同工場では塩化ビニールと酢酸を作る触媒に水銀を使い、さらに硫酸を作るのに硫化鉄を使っていた。このチオエーテルは硫化鉄から作られるもので、水銀やタンパク質と容易に結びつく性質をもっている。このような

新事実から工場廃水と水俣病との関係はいよいよはっきりしてきたと同博士はいっている。